広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	老人 〈一般〉
Author(s)	ミリヴィーリス, ; 岡野, 純
Citation	広大言語 , 9 : 16 - 19
Issue Date	1969-12-23
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046336
Right	
Relation	

朝になつて部屋の窓を開けると、眼前に峨峨たるタイゲトスの山肌が望み見られる。なるほど、スパルタ精神というものもこのようなきびしい環境の中でこそつちかわれたものであつたかと合点の行く思いがするのであつた。博物館を訪れ、タクシーでミストラへ行く。これはタイゲトスの山麓斜面にビザンテイン時代末期に大いに栄えた都市のあとである。

ギリシアのポンペイともいわれ、中腹にパンタナツサという尼寺があるほかは、すべて住居、王宮、寺院の廃墟である。まことに凄絶といつた感じ。急坂をよじ登る大急ぎの見学で、汗は流れ喉はからからに渇く。山を下りて飲みものでもと思つたが、アテネ行きのバスに間に合うためには休憩のいとまもない。2時スパルタ発のバスに乗りアテネへの帰路につく。羊群を追う老牧人、葡萄畑におり立つ農夫の姿などを車窓にくり開げながら、岩山また岩山の峯々や谷々をバスはひた走りに走つた。行き交う車の数もきわめて少い。　道は所々で鉄道の線路と交叉するが、一本のチェーンが線路の上にそれと直角に置いてあるだけ。汽車が来るとそれでこんどは道路をさえぎるのであろうか。1日に数えるほどしか列車の通らないそのあたりだからこれでいいのだろうが、ともかくのんびりした風景であつて、何か前世紀の世界を旅しているような感じすらする。アテネに着いたらもうすつかり日が暮れていたが、ここは人と車で雑踏する20世紀のメトロポリスであつた。

老　　人

ミリヴィーリス
岡　野　純　訳

リカベトスの広場に面した古い街区にある私の家の窓の外わずか数歩のところに一本の松の木があつて、われわれはそれを「老人」と呼んでいる。腰は屈み、髪は薄く、人が好くて忍耐強いおじいさんに、これほどよく似た木はほかのどの広場にも見られなかつた。

この思いやり深い老木が子供たちにとつてどんな魅力があるのか、それはわからない。

この街区には沢山の繁つた松の木があり、また多ぜいの喧しい子供たちがいる。しかしほかのどの樹木もそのまわりにこれほど数多い子供仲間を集めてはいなかつた。なぜというに、それは腰の曲つた大木で、枝につかまらずにその背中に登れるからである。だからそのまわりには学童たちが、髪に蝶形リボンをつけた少女らや、肩に鞄をかけた少年たちが集まつてきて、いつもさまざまのいたずらをしてその木をいためつけるのであつた。

「老人」はその背中に、一度に五六人の子供をのせていることがたびたびである。枝の間で彼らはひな鳥のように声を立てたり、青い松葉をむしりとつたりする。そのために「老人」は葉の茂みのまん中がはげになつてしまつていた。

こうして「老人」は、いたずらをやめさせることもせずに子供らに悩まされるにまかせている大きな動物のような印象を与えるのであつた。

私がその木の傍を通つて見るたびに、それは背中に群がつた多ぜいの子供にとり巻かれながら、しかもいつも自分は黙つたままでいる。そんな時、私はその赤く傷つけられた樹皮の下に心が存在しているのがわかるのである。それは、すべてを受け入れ、すべてを許すやさしい樹木の心なのだ。

どんなに小さな子供でもその背中に登れるようにと、どのように背中を背げ、どのように身を屈めているかを見てみるがよい。

とうもろこしのひげで結んだ二本のお下げを垂らした小さなアンナまでもが木に登りに行こうとするときなど、「老人」はアンナが落つこちないようにと、一層身を屈め大地にくつつかんばかりになるのである。

「老人」は、だから、ほんとに寛大な心をもつているのだ。今日も私は通りがかつて見たのだが、「老人」は背中にコスティスをのせ、その枝の中で揺さぶつてやり、コスティスは人が自分に注目するようにと大きい声をはりあげていた。

「見てみろ！　見てみろ！　」

コスティスはひ弱い、背の低い子供である。彼は占領下で生まれ、母親は飢えで死んだのだ。何という腕、何という脚、まるでつま楊子のようだ。彼の顔はくしやくしやしていて、短い歳月の間にもう老化しはじめたかのようにしかつめらしく、眼はオリーブの実のように黒く、その上斜視である。彼は冬も夏も襟に毛のついたアメリカ製のオーバーを着ている。始終叫び声をあげ、また声を出さない時には、斜視のため眉をしかめているので顔は怒つたように見える。この大人つぽい子供の額の上には、すでに人生の苦悩が最初の皺をしるし始めているのだと考えてよいのだ。にもかかわらず、彼はその顔の上に何か共感的なものをもつている。それは、甘い陽光によつて狂わんばかりに彼の周りで楽しくはなやかに叫び声をあげる他の子供らの中に認められるのと同じような、何か覚醒した、原型的なものなのである。

こうしてコスティスも「老人」の背中に登り、すつかり夢中になつているのだ。

「見てみろ！　見てみろ！」

ただ一人の子供だけがわれわれの善き「老人」の背中に決して登ろうとしなかつた。それはディーノスである。

彼はリカベトスのデネケドスビトスの出であつて、（第一次）大戦後の外国からの引揚げの時から森のはずれに住みついている人たちの子供である。ディーノスはもう大きい。十歳か十二歳の少年である。彼は「老人」のまわりを廻り、眼を挙げて木を眺める。彼は、他の子供たちが木に登りその節くれのある腕から果実のようにぶら下り、枝の上で動きまわり、木の股に止つているのを見

ている。そしてディーノスはたえずあちこちと歩き廻り、彼らを眺め、その声を聞き、遊びについての意見を出し、他の子供がもつと高く登るにはどうしたらいいかの助言を与えたりするのである。しかし自分は、この人のいい樹の背中には決して登らず、枝の上に馬乗りになろうとしなかつた。

なぜというに、ディーノスは不具の少年であるからだ。

十二月事件の時、手榴弾が彼の脚に当たり、膝から下を断ち切つたのである。

今は、彼は二本の松葉杖で歩いている。腋の下に当てがわれた安価な白い木製の小さな松葉杖である。脚を切断した時、彼は小さかつたが、今やすつかり大きくなつて、やせた身体はたけ高くなり、四肢も伸びた。ただ切断された脚だけは生長しそうもない。こうして木製の松葉杖はもう彼の身体に合わなくなつてきた。だからディーノスが大きくなるにつれて、彼の松葉杖も長くならなければならないのである。そのためにその端に二きれの木が継ぎたされて、前より重くなつていた。ディーノスは二本の杖の間で小さな足どりで歩くので、疲れた大きいばつたのように見える。傷ついたばつたのようである。不具になつた脚は、ひからびた樹枝のようにぶら下り、彼のズボンは膝の下で折り曲げて、大きい安全ピンでとめてあつた。

「老人」はしかし何も知らない。彼はディーノスを他のすべての子供らを見ると同じように見ているのである。

彼はまたディーノスの木製の松葉杖を見て、子供つぽい一本の脚と、木で作つた二本の脚をもつ子供がこの世にはいるんだと考える。「老人」は寛大な心をもつてはいるが、しかし全く脳髄をもつてはいないのだ。

そんなわけで「老人」は不審に思いながらも、ディーノスが自分の枝に登れるようにと、できるだけ背中を曲げるのである。コスティスでさえも木に登り、その上から、人が彼に注目するように「見てみろ！　見てみろ！」と声をかけるくらいなのだから。

「老人」は皮を剝がれた背中をぐつと曲げてみせるが、それでもディーノスが、木の枝の上を動きまわつているほかの仲間たちと同じように登つてきて、そこにまたがつてみようとしないのをまことにいぶかしく思つているのである。

ミリヴィーリスについて

ミリヴィーリス（Stratis Myribilis——本名はS.Stamatopoulos）は1892年に古代ギリシアの女流抒情詩人サツポーを生んだレスボス島で生まれた。ミティリーニで週刊誌Kampana（1922～1924）および日刊紙Tachydromos を刊行。Kampanaに「墓場でのいのち」を連載した（1924）。これは、ストゥーラス軍曹のその妻に宛てた手紙という形式の下に、第一次世界大戦のマケドニア戦線でのむごたらしい塹壕戦を材料として、戦争における死への恐怖・憎悪と生への牧歌的な欲求とを描いた一種の反戦的ルポルタージュであつた。

これによつてミリヴィーリスは文壇での新人としての地位をえたが、のちアテネで再び出版され（１９３０年）、大きい成功をおさめた。その後、彼はアテネにおいて種々の新聞の主筆、論説委員、文芸寄稿家として活躍、１９５８年にはアテネ・アカデミアの会員に選ばれ、ギリシア文芸協会の会長にもなつた。彼の小説には「墓場でのいのち」の姉妹篇ともいうべき「金色の眼の女教師」（１９３３）のほか、「大地の歌」（１９３７），「ヴァシリス・アルヴァニティス」（１９４３〜１９４４）「タ・パガナー」（１９４５），「パン」（１９４６），「聖女ゴルゴナ」（１９５３）さらに少年小説「アルゴナウテース」（１９３６，１９４３）などがある。「墓場でのいのち」「聖女アルゴナ」などは諸外国語にも訳され、好評を博した。また短篇小説集には「赤い物語り」（１９１５），「短篇集」（１９２８），「緑の本」（１９３５），「青い本」（１９３９），「赤い本」（１９５３），「さくらんぼ色の本」（１９５９）など一連の色の名を冠した作品集があり、上に訳された「老人」は「緑の本」の中の一小品である。（Ｊ．Ｏ．）

教育実習の思い出

香　川　ミチ子

秋も深まりゆく頃、私は久方振りに母校の土を踏みました。第一週目は小学校でした。二年生を受持つたのですが、割振りの関係で初日の一時間目の国語を、まず、やつてみてくれということになり、とんだことになつたと思いました。

小学校の低学年といえば、使用出来る語彙数も相当限られてくるけれどもと思案していると、「貴女は言語学専攻だから、その知識も旨く取り入れて・・・・」と担当教官に発破をかけられて一層当惑しました。

指導案の書き方も、初めてで要領は、つかめないし、教生として第一号の授業だから、他の人のは参考に出来ないしで、その前夜は、三時半まで寝られず、おまけに、明け方近くには、自分が必死になつて授業をしている夢まで見ました。その朝は、八時四十分始業のところを八時二十分頃に学校へ行き、腕時計の針を気にしながら、四十分間の授業を教案通りに終えた時は、本当に、ほつとしました。放課後の批評会の時、"始めてにしては"という条件付きでしたが、好評でしたので、"成せば成る"とはよく言つたものだと内心満足の体でした。

さて、その担当授業の直後、先輩から話には聞いていたのですが、女の子達（？？男の子達は来ませんでした）が、数人寄つて来て、あつちに行こう、こつちに行こう、と言つて、手を離さないのです。私も、つい嬉しくなつて、皆と一緒に外に出て、ドッジボールをして遊びました。童心に帰つて精一杯遊びました。私の投げたボールが当たると「カッコイイ！」という歓声が上がりました。